

---

# 東方天想夢 ~ Desire Sky.

六鈴丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方天想夢 ～ Desire Sky .

### 【Nコード】

N8301D

### 【作者名】

六鈴丸

### 【あらすじ】

幻想郷に住む博麗神社の巫女、博麗霊夢。霊夢他はスペルカードによって起きた異変を解決していく。異変によっては調査に向かう主人公が違ったり。異変中に他の会話もあつたりします。

## 第壱月　　子初月

「今夜は星が綺麗ね。」

私は神社の境内から星を眺めていた。その圧倒的な数に、星一つ一つが弾幕にも見える。

そして大きく光り輝いている月は我々人間に強く刺激を与えてくる。それ故あまり夜空を見ることはないのだが。

星といえば、少々デジャヴがあるな。

「霊夢？そんなところで何やってんだ？」

そう、こいつだ。弾幕はパワーとか言うが、普通の魔法使いらしく、まあ妖怪退治に喜んで出かけるとか普通の人間とはいいいがたいところもある。

そして私の昔からの友人でよく神社に来てくれる。それはいいんだけど、窃盗の悪癖があるから人の物を勝手に盗んでいけないでくれと願いたい。

「夜空を見ていたのよ。いつも以上より綺麗だし、明日は晴れるかもね。」

「うん、そうだな。なんなら明日パツとパーティでもするか？」

「別に明日何かあるわけでもないし、昨日も今日も一昨日もそのまた前の日も毎日宴会だったからどうせ明日も宴会でしょ。」

私も随分と懐かれたものだ。吸血鬼、亡霊や天狗、西瓜とか大量に来て毎回宴会するし。

「はは、なんだったら大きな異変でも起きないかねえ。」

「ばか、平和が一番よ。」

まったく、縁起の悪いことを言う。この人は疲労という言葉を知らないのか。

「うーん、まあ最近はその言う予感がしないしな。と、私はもう帰るぜ。また明日。」

「ちょっと待ちなさい。人の御札や本、マジックアイテムとか萃香を勝手に持っていていけない。」

「分かってるぜ。でも萃香は無理があるぜ。」

そう言つて魔理沙は魔法使いらしく、ホウキに乗つて空を飛んでいった。見えなくなるまで見送つた後、私はため息をついてまた夜空を見上げる。相変わらず月は強く妖力を放っている。

「・・・本当に何も起きないといいんだけどね。」

私たちの住んでいる幻想郷は、東の国の边境の地に存在するとさ

れている。

ここには妖怪などの人外のものが多く住んでいるが、僅かながら人間も住んでいる。

幻想郷は強力な結界によって幻想郷外部と遮断されているため、外部から幻想郷の存在を確認することはできず、幻想郷内に入ることもできない。

同様に幻想郷内部からも外部の様子を確認することはできず、幻想郷から外へ出ることはできない。

そのため、幻想郷では外の世界とは異なる独自の文明が妖怪たちによって築き上げられている。

なお、幻想郷は結界で隔離されてはいるものの、異次元や別世界といったものではなく、幻想郷も外の世界も同じ空間に存在する陸続きの世界である。

「あの時の吸血鬼異変から、私たちは大きく変わったわ。」

吸血鬼異変。

幻想郷に出現した吸血鬼が幻想郷の支配を目論んで起こした紛争である。吸血鬼は強い力を持っていたため、多くの妖怪が吸血鬼の部下となったが、最終的には強い力をもった妖怪によって鎮圧された・・・。

この事件がきっかけとなり、スペルカードルールという決闘ル―

ルが制定された。

「スぺルカードルール……。幻想郷内での揉め事や紛争を解決するための手段とされており、人間と妖怪が対等に戦う場合や、強い妖怪同士が戦う場合に、必要以上に力を出さないようにする為の決闘ルールのことね。」

対決の際には自分の得意技を記した「スぺルカード」と呼ばれるお札を一定枚数所持しておき、すべての攻撃が相手に攻略された場合は負け。

また、カード使用の際には「カード宣言」が必要とされるため、不意打ちによる攻撃は出来ないとされる。

しかし、人間や妖怪はこのカードを利用して、様々な異変を起こした。異変が起きたときはいつも博麗神社に住んでいる博麗 霊夢、または普通の魔法使いの霧雨 魔理沙が調査に向かい、犯人を見つけて懲らしめるという流れが基本である。

そのような流れの中、人間と妖怪の住む幻想世界。それが幻想郷だ。

## 第貳月　　四候操異変

幻想郷の今の季節は春。美しい花や桜が咲き乱れる季節。そう、春のはずなのだ・・・！

「あ、暑いっ！いくら何でも晴天すぎるでしょ！？」

太陽の光がじりじりと照りつけてくる。それはもう影が出来ないくらいに。まるで真夏だ。だが周りは春の花の良い香りがする。なぜか夏の花も混じっているが。

「季節的におかしい…。あの夜空はこれの前兆だったのかしら。」

眩しい灼熱の熱線により汗がどんどん出てくる……。燃え尽きそうだ。

「あら、大変なことになってるみたいね。これじゃあ氷の妖精も脳が溶けちゃうわね。」

「紫…。」

くすくす笑いながら境界から紫が現れた。その涼しい顔からして、ずっと境界の中で寝てたに違いない。それに比べ私はとても苦しい顔をしている。

「そんなところにずっといると日射病になるわよ。早く境内にはいりなさい。」

「あんたは境界操れていいわねえ…。」

紫の言葉に甘えて境内へ入ったわけだが…。  
なぜか急に寒気がした。

「・・・雪？と、雨。」

こんなに日が照っているのに急に雨と雪が降り始めた。見渡すと春夏秋冬の花が咲いているし、紅葉してる葉もあって桜も花びらを散らせている。

「やっぱりおかしいわね。また誰かの仕業かしら。前にも似たようなことがあったけど、今回は幽々子じゃなさそうだしねえ。」

流石に陽気にしていた紫も、顔を顰める。

前に似たようなこととは、春雪異変のことだ。

春の季節になったにもかかわらず、いつまでも冬のように雪が降り続けた異変である。しかし今回は少し違う。四季も天気も、滅茶苦茶である。

「・・・ちよつと暑くて寒くて、風邪引きそうだけど調査するべきかしら？」

「待ちなさい。少し休んでからにした方がいいと思うわ。日光に長時間当たりすぎよ。」

長時間寝すぎの紫に言われてもあまり説得力は無いが。  
でも私のことを心配してくれてるみたいだから休むとするか。



「あ、暑いんだぜ!」

「こら、叫ぶと余計暑くなるわよ。うう、寒い。」

一方、魔法の森。ここに住んでいる魔理沙とアリスも異変を感じていた。いくら願望していた魔理沙でも、四季や天候が滅茶苦茶では流石に怒り狂っている。

「こんなムカつく現象初めてだぜ。まったくこのどいつが起こしやがったんだ?」

そのどこのどいつか分からないのにアリスに怒りをぶつけても仕方が無い。しかし、焼き尽くされそうなくらいの暑さと凍え死にしそうなくらいの寒さ。アリスの方も苛立ちが湧いてきているのが分かる。

「あまりここにいると風邪を引くわね。一旦中へ入りましょう。今回は霊夢が何とかしてくれるだろうし。」

「チツ、また霊夢か。悔しいぜ。」

文句を呟いている魔理沙を、アリスが無理矢理引っ張って中へ入らせた。

「霊夢、紫。今回は頼んだわよ。」

「咲夜。」

「はい。またおかしな現象が起きましたね。四季天候が滅茶苦茶です。」

「これは少し困るわね。まともに生活することが出来ない。」

紅魔館では咲夜が光によって照りつけられている空を眺めていた。レミリアは椅子に腰掛け、紅茶を啜っている。

紅茶を皿の上に乗せて、語り出した。

「蒼空に舞う天の獅子王が暴れているわ。誰も止めることの出来ないほどにね。しかし止められるのはあの少女。もう私たちの『運命』は彼女にしか委ねられてないの。私たちはこうやって無事を祈るしかできない。いくら『運命』を操れる私でも、指をくわえて見ていることしか出来ないのよ。」

「は、はあ。」

その時レミリアは椅子から立ち上がった。ゆっくり扉の方へ近づいていく。

「おっと、客が来たわね。この世界の『運命』は生か、死か。一人による一つの選択によって全てが決まってしまうの。間違えてしまえば即刻、死…。」

「なかなか深いことを言いますが…。彼女は…。」  
「間違った選択なんてしませんよ。」

それを聞いたレミリアはふっ、と微笑む。

「よく言っ たわ、咲夜。それじゃあ私は彼女を信じることにするわ。」

「

「あつ　。雪だ。」

「桜がこんなに咲き乱れているのに、雪、ねえ。」

白玉楼にいる妖夢と幽々子は満開の桜を花見していた。周りにいた幽霊もこの現象に驚き戸惑っている。

「幽々子様、これは…。」

「うーん、『四候操異変』と名付ければ良いのかしらね。誰かによつて引き起こされた、四季天候が荒れ狂った異変…という感じね。」

「これじゃあ落ち着いて花見できませんねえ…幽々子様？」

「そうでもないわよ。色んな季節の食べ物が穫れるようになるし、ありがたいわ。」

妖夢は呆れたようにため息をつく。

「少しは食べ物のことばかり考えていないで、幻想郷の心配して下さいよ。」

「うふふ、冗談よ。」

幽々子は口に扇子を当て、軽く笑い出した。

「まったく…。あら？客が来たみたいですよ。」  
「ん、本当ね。」

二人はこちらに向かってきたいる方へ駆け寄っていった。

第参月　　御転婆妖精『丸玖』

「犯人が何処にいるか大体分かったわ。」

何か心当たりでもあるか、紫が突然そんなことを言い出す。

「へえ、どこなのかしら？」

「『竜の巢』よ。天に渦巻いている大きな雲。まあここからじゃ見えないからかなり高いところにあるけどね。」

それを聞いた霊夢は咂然とする。当たり前だろう。高いところまで行かなければならないし、入るだけでも危険である。紫はそんなことにしていないようだ。

だがしかし、何故すぐに場所特定が出来たのだろうか…？

それは一応場所が分かったんだから置いておいて、道のりは結構険しい。なぜなら妖怪の山に登らないといけないからだ。

妖怪の山に住んでいる天狗や河童などの多くの妖怪たちは、山に入り込もうとするものを追い返そうとする。わざわざ頂まで登らないといけない為、途中で見つかる色々面倒なことになってしまう。うーん、その時は射命丸に頼るしかないかも知れない。

「大丈夫よ。邪魔するものは弾幕で排除しなさい。」

「分かってるわ。何とかしてでも懲らしめないと。」

強い日差しと冷たい風の中、霊夢と紫は竜の巢へ向かった。

「待てー！その二人！」

霧の湖を通り過ぎようとしたとき私たちを呼び止めたのはチルノだった。

「あら、チルノじゃないの。こんな異常事態の時にここにいるなんて本当にバカかしら？」

「バカっていうなー。お前達こそ何やってるんだ？」

言わずとも見れば分かることを聞いてくる自体頭が弱いのだろう。ここに来ることなんて滅多にないのに。

「いつものことよ。貴方と話をしている暇なんて無いの。邪魔をするなら速攻で片付けるわよ？撃つと動く！」

最後に魔理沙のセリフを混ぜて私は退くように忠告した。

「邪魔した覚えは無いわ。あと打つと動くって、野球か？だったらやろーよ。」

こいつはまるで状況が読めてないようだ。その後さすがの紫も苛立っていたらしく、妖回針を放ってあっけなく懲らしめてしまった。南無。

「ちょっとひどくねー」

「さあ霊夢、こんな氷の妖精無視して先へ行きましょう。」  
「うーん、そうね。」

あまりのチルノの無様さに、苦笑いをする。

「むむ、何奴だ！」

門番の紅美鈴が紅魔館へ訪れた妖怪に向かって叫ぶ。

「あなたは門番の・・・中国だったかしら？いや、ほんみりん？みつりん？」

「紅美鈴だ！ホンメイリン！覚えておけ！で、ここまでなんのようかしら？」

美鈴は呼び名に対して怒りながら、目的を訪ねる。

「幻想郷を彷徨っていたらここまで来てしまったの。というわけで休ませてくれないかしら？」

「断る。ここはホテルじゃねーんだぞ！」

即答した美鈴だが、彼女が幻想郷を巡礼できるほど大きな力を持っているということを見抜いていた。さらに彼女の服装は巫女っぽい装束。あくまで巫女っぽいが多少霊夢に似ている姿形をしていた。紅霧異変の時に酷い目にあったトラウマがばんやりと蘇ってくる。

紅霧異変とは、レミリアが起こした幻想郷が紅い霧で覆われて

しまった異変のことである。

当時霊夢や魔理沙が紅魔館に来て色々暴れ回った。（美鈴から見た感じで）

「それは残念ね。だったらスペルカード発動させてもらっわ。」

「え、ちょ、ちよつと待っ　　！」

次の瞬間大量の弾幕が降り注ぐ。美鈴の意識はここで途絶えてしまった。



## 第肆月　く幻想郷巡礼者く

「客が紅魔館に入ってきたみたいです。まったく、美鈴は何やってるんだか。」

咲夜が大量にナイフを用意している。多分全部美鈴お仕置き用。

「彼女は必ずここへ来るわ。それも、『運命』。もちろん美鈴が警備を疎かにしたのも、『運命』ね。」

「お嬢様、前者は頷けますが後者はハッキリ言って違うと思います。」

そして、白玉楼でも客が一人。人間のような。

「ここが白玉楼……。」

「私とその白玉楼の主人、西行寺　幽々子よ。」

ぬつと幽々子が出てきたため、彼女は驚いて尻餅をついてしまった。

「幽々子様っ！　出会い頭に脅かしちゃ駄目ですよー！」

「ふふふ、ごめんなさいね。大丈夫かしら？」

彼女を見ると、妖夢と同じくらいの少女だった。紫のような珍しい服装をしている。

「だ、大丈夫……。でも尻が……。」

かなり驚いたんだろう。立つのには時間がかかりそうだ。

「本当にすまないな。主人がこんなもので。しかしこんな時に何故ここに？名は？」

彼女はやっと立てれるようになった。

「朱鳥 能理子よ。ちよいと前に神隠しで幻想郷に来ちゃって、それで巡礼してただけど……。」

幽々子、妖夢は苦笑いをする。

（八雲 紫のことかー！）

（犯人は八雲 紫。）

「しかし、ここは桜が綺麗で良いところだな。よし今日はここ近くで休むことにするわ。いいかしら？」

「無理に決まっているだろう、幽々子様？」

「いや、ちょっと待って。」

幽々子が能理子に近づく。ゴクリ、と能理子は唾を飲む。

「おいしい食べ物をもってるかしら。そしたら考えてあげる。」

ズテツ

妖夢が滑って転ぶ。

「ゆ、幽々子様」

「おいしいものならあるわよ。さっきそこで買った焼き鳥。」

「ミスティアね！少し出かけるわ妖夢！」

幽々子は目を光らせて森の中へと入っていった。

その後誰かの悲鳴声が聞こえてきたような気がする…。

「へっ・・・つくしゅん！」

「あら霊夢。風邪でもひいたのかしら。」

私と紫。名称「結界組」はゆっくり妖怪の山の頂へと向かった。

「ちょ、ちょっと冷氣に当てられただけよ。たいしたことは・・・へっきしっ！」

「くしゃみばかりしていると妖怪に見つかるわよ。」  
「好きでやってるわけじゃないのよ！」

竜の巢に近づくほど異変は酷くなる。まるで嵐のようだ。しかし普段寝てばかりいる妖怪が、風邪をひかないのは何故なのだろうか。

「でも、本当に見つかったりしたら…。」

「ふふ、くしゃみばかりしてる変な奴がいると思えば…。」

目の前に天狗の妖怪が現れた。

「他所から来た人間と妖怪だったか。」

「ほら見なさい。くしゃみするからこうなるのよ。」

「あんたねえ…。」

私は頭に怒りマークがついたが、今は喧嘩をしている場合ではない。

「痛い目にあいたくなければ、即刻立ち去ることね。」

「この異変を止めるには頂に登らないといけないの。通してくれるかしら?」

「わざわざ妖怪の山を使わなくてもいいんじゃないの?」

確かに、正論だ。だが妖怪の山でないと条件が揃わないのだ。

「妖怪の山じゃないといけないの。山と言えばここだし、射命丸も

いるしね。」

「そういつこと。」

「だが、ここで通せば天狗としてのプライドが……。」

「うーん、これ以上言っても無駄みたいよ？力づくでも通してもら  
うしかないみたい。」

「残念だわ。私の名は笹風 鈴。私は射命丸とは違う。天狗の力、  
とくと思い知りなさい。」

「ゆっくりしていいね！」

そして、この異変が起こって初めてのスペルカードの戦いが始ま  
ることとなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8301d/>

---

東方天想夢 ~ Desire Sky.

2010年10月9日13時46分発行